
心理検査を用いた青年・成人の軽度自閉スペクトラム症 (ASD) のスクリーニングについて

Screening for Subthreshold Autism Spectrum Disorder (ASD) in Adolescence and Adulthood Using Psychological Tests

西藤奈菜子 川端康雄

大阪医科大学神経精神医学教室

寺嶋繁典

関西大学大学院心理学研究科

米田 博

大阪医科大学神経精神医学教室

Nanako SAITO and Yasuo KAWABATA

Department of Neuropsychiatry, Osaka Medical College

Shigenori TERASHIMA

Graduate School of Psychology, Kansai University

Hiroshi YONEDA

Department of Neuropsychiatry, Osaka Medical College

◆要約◆

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD) の心理アセスメントでは、ASD 特性を測定するための心理検査の開発や ASD に特有な反応の調査など、様々な側面から研究が進められてきた。特に近年は、精神症状や疾患を有する軽度の ASD への適切な治療や支援が注目されており、軽微な ASD 特性のスクリーニングが課題となっている。

ASD のスクリーニングには、従来、養育者による他者評価や患者自身の自己評価に基づく自記式の質問紙検査が使用されてきた。しかし、ASD 特性が軽微で知的発達にも顕著な遅れがみられないケースについては、的確にスクリーニングすることが難しい。特にセルフモニタリングを苦手としている ASD では、自記式の質問紙検査による判定が適切に行えない場合も少なくない。

本稿では、軽度の ASD の青年や成人のスクリーニングにおける自記式の質問紙検査の限界と投影法検査によるスクリーニングの可能性について概観し、有用なスクリーニングツールのあり方について検討する。

キーワード：軽度 ASD、自己理解、セルフモニタリング、スクリーニング、投影法検査

Abstract

Research on autism spectrum disorder (ASD) assessments has advanced in various aspects, such as developing tests to specify the traits of autism and studying specific reactions associated with ASD. In recent years, increased attention has been given to appropriate treatment and support for individuals with subthreshold traits of autism and mental disorders. Further, it has become a challenge to develop screening tools for subthreshold autism traits. Within the realm of ASD assessment, it is difficult to effectively screen individuals through evaluations by caregivers and self-descriptive questionnaires when intellectual development is within normal limits and autism traits are subthreshold. Because individuals with subthreshold autism traits may have limited self-monitoring, they may not be assessed properly through self-descriptive questionnaires. This paper will review the limits of self-descriptive questionnaires and the possibility of projection tests for the screening of adolescents and adults with subthreshold ASD, and examine the most useful screening tools.

Key Words: Subthreshold ASD, Self-understanding, Self-monitoring, Screening, Projective tests

1. 問題と目的

ASD への社会的な関心や認知度の広まりとともに、ASD の診断基準に合致する子どもに対しては、早期の段階から様々な支援が行われるようになってきた。その一方で、診断基準に満たない軽微な ASD 特性を有する青年や成人への支援が課題となっている。「スペクトラム」という概念が提唱されたのは、知的発達に課題のない高機能自閉症や言語能力に障害の少ないアスペルガー障害の人々が、当初想定されていたよりも多く存在し、生活の様々な局面で困難を抱えていることが明らかになったという背景がある（アスペ・エルデの会 2013）。ASD の特性を有していても、その程度は軽微で幼少期には目立たず、学力面でも顕著な課題がなければ、支援の対象にはなりづらい。このような軽度 ASD では、青年期や成人期に達して適応上の課題をはじめて生じ、医療機関を受診するケースも少なくない。まして二次障害として、抑うつや対人不安といった他の精神症状や疾患が前景に出ている場合は、養育者からの正確な情報でもない限り、ASD 特性の存在に気づきにくく、適切

な評価や支援にもつながりにくい。最近では、軽度 ASD と精神疾患の関連にも注目が集まっており、摂食障害者の多くに軽微な ASD 特性がみられる可能性も示されている（Dell'Osso, Carpita, Gesi et al 2018）。また、発達障害の児童から成人までを対象とした全国の医療・福祉機関におけるアセスメントツールの利用実態に関する調査報告（アスペ・エルデの会 2013）によると、児童相談所を除く医療・福祉機関では、アセスメントツールが十分に普及しておらず、特に 18 歳以上の人々が利用する施設・事業所におけるアセスメントツールの普及率は約 10% に過ぎないことが示されている。アセスメントツールを利用しない理由としては「人員不足」が最も多く、「時間的余裕がない」ことなども挙げられており、成人の発達障害支援の現場においてアセスメントを行うことが難しいという現状が明らかになっている。さらに「軽度な発達障害をチェックできるツールがない」といった意見もみられ、支援の現場で簡便に使用できる軽度 ASD のスクリーニングツールの開発が求められている。

軽度 ASD の青年や成人を対象としたスクリ

ーニングツールとしては、まず自記式の質問紙検査が考えられる。この種の質問紙検査では、自己理解がある程度、正確にできることが前提となる。ただ、ASDの中には自己の状態を客観的に認識できないほか、言語理解や言語表現に課題を有する者も認められる。臨床現場でASDのスクリーニングにAQ（Autism Spectrum Quotient：自閉症スペクトラム指数）という自記式の質問紙を用いると、ASDと診断された者でも、AQ上はASDと判定されない場合があり、これは本人の自己理解が正確でない可能性を示唆している。軽度ASDのスクリーニングでは、自己理解の程度を考慮したスクリーニングツールが必要となる。本稿では、ASDの自己理解に関する従前の研究を概観し、その後、スクリーニングを目的としたツールとして、どのような心理検査が有用であるのかについて検討する。

2. 軽度 ASD の自己理解について

ASDの名称にも使用されている自閉という用語は、Bleulerが統合失調症の一症状として記述した概念であり、「外界との交流の狭窄」、つまり自己の内に閉じこもり、外界との接触をできる限り制限した状態を指す（石井 2010）。自閉と自己という問題は、本質的に切り離せないテーマであり（菊池 2009）、これまでもASDの自己については認知的側面、情動・情緒的側面、生物学的側面など様々な側面から検討が行われてきた。自己とは、ジェームズ（1992）によると「知る主体としての自己：I」と「知られる客体としての自己：Me」という二重性を持つものであり、さらにMeは物質的自己、社会的自己、精神的自己の3つの構成要素から成り立つ。その中でも自己の社会性については他の研究者によっても重視され、ミード（1995）は、自己を他者との関係形成の結果として発達するものとしてとらえている。これまでの自己に関する研究は、自己が社会や他者との関係性をなくして

は成り立たないことを明らかにしている。つまり、自分自身についての理解を深めるためには、他者を含め社会生活（環境）との関係性が必要不可欠といえる（滝吉・田中 2011）。自己が社会との関わりのなかで形成されるのであれば、他者との関わりに課題を有するASDの自己理解はどのような様相を呈しているのか、先行研究について概観する。

自閉症にみられる様々な行動上の問題が「他者の心を読み取れないこと」により生じるとする「心の理論」欠損仮説（Baron-Cohen, Leslie, Frith 1985）は、自閉症研究において注目を集め、それ以降数多くの研究が行われてきた。ただ、心の理論の代表的な課題である誤信念課題（他者の信念や心の動きをとらえる課題）では、一定の割合で課題を通過する自閉症児が必ず存在すること（Baron-Cohen, Leslie, Frith 1985）、またこの課題を通過するアスペルガー障害であっても、対人関係や社会適応に依然課題はみられること（Bowler 1992）が明らかになっている。さらに、嘘や冗談、皮肉といった内容を含む物語の理解度を調査したハッペ（1997）の研究では、自閉症群は対照群と同様に、字義通りにとらえることのできない複雑な社会的場面でも、相手の心理的な状態について回答することが可能であることを示している。ただ、回答内容を検討すると、物語の文脈に沿わない不適切な説明を行うことがあり、自閉症群は対照群とは異なる特異な視点によって出来事をとらえている可能性を示唆している。これらのことから、ASDは「心を読む力が欠けている」のではなく「心を読む視点がずれている」とされ（山口 2016）、このずれが自己理解の質や程度に影響しているとも考えられる。

さらに、ASDの自己理解に関する大きな特徴の一つは、「対人的な関係性の中で自己を位置づけることができない」ことである（菊池 2009）。このことは様々な研究で実証されている。例えば、自閉症の児童と青年を対象に、自分自身のことに関する言語的インタビューの回答を分析

した Lee, Hobson (1998) の研究では、自身の身体的な特徴や能力、行っている活動に関する内容や発言数は対照群との間に差がみられなかった。しかし、社会的な相互作用や関係性に関する内容について質的な違いがみられ、自閉症群は友人や社会的集団に関する言及が少ないなど、自己を定義する際に他者との関係性を考慮していないことが示唆された。また、十一・神尾 (2001) は、高機能自閉症者における自己意識（他者に対して自分自身を意識すること）の成立に関する研究で、自己意識の希薄さを指摘しており、自分自身のことを他人事のように話すことが多く、他人の視点を前提として生じる「恥ずかしい」という感情に乏しいといった自閉症者への臨床場面で受ける印象と合致していると述べている。さらに Ben-Itzhak, Abutbul, Bela et al (2016) の ASD の感情理解に関する研究では、ASD 群は感情が誘発された出来事について尋ねられた際に、回答をしない、あるいはわからないと答えたり、奇妙（的を外れ）な印象の回答をしたりすることが対照群より多く、社会的な状況や自己認識に関連した内容を述べるのが少なかったとしている。

これらの研究によると、軽度 ASD は自分の身体的な特徴や能力、活動など、事実として存在している事柄については認識し自己評価も良好と考えられる。しかし社会的な場面において、周囲の状況や相手の様子を考慮した内省が深まりにくく、結果的に対人コミュニケーションで生じる課題についても認識されにくい傾向を示唆している。

なお、これらの社会的場面における自己理解に関連する概念として、セルフモニタリングがある。スナイダー (1998) は、セルフモニタリングを「社会的な場面において、その場の状況に適切かどうか、自分の行動を観察し、統制すること」と定義している。そして、人は誰でも社会的な状況や人間関係の中の自分をモニターする、つまり自分を観察し、規制し、コントロールするが、その度合いは人さまざまで、その

セルフモニタリング度の違いが、社会的な行動や人間関係に大きな影響を及ぼすと述べている。今後、軽度 ASD とセルフモニタリングの関連について検討することで、軽度 ASD の社会的な場面における自己理解の様相を把握できる可能性があると考えられる。

3. 軽度 ASD を対象とした質問紙検査によるスクリーニング

質問紙検査は、結果の処理や解釈が容易であり、様々な場面で用いられている。しかし、質問紙検査の回答は自己報告であり、自分についての理解度や言語能力などの影響を受けやすい。特に ASD の場合、既述の研究結果からみても、これらの影響を受けやすいと考えられ、質問紙検査の有用性については慎重に検討する必要があるだろう。

前述の AQ では、アスペルガー障害や高機能自閉症に配慮して、特定の行動をするかどうかを直接的に問うのではなく、特定の行動を好むかどうかを尋ねる質問項目（例：「何かをするときには、一人でするよりも他の人といっしょにすることを好む」など）を採用している (Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner et al 2001)。しかし、最近では「一見すると人懐っこくて積極的に人と関わりを求めますが、関わり方が一方的で相手の反応に無頓着」といった特徴を示す ASD の存在も知られている (本田 2013)。社会的な場面での自己理解に乏しい ASD の場合、周囲の困惑に気付かず、「自分は社交的で、雑談が得意」と自己評価している可能性があり、社交的か否か、一人を好むか否かといった質問項目では、ASD の対人場面における特性を適切に測定することは難しいと考えられる。軽度 ASD のスクリーニングでは、ASD の被検者が自分でも気付いていない、社会場面で生じているコミュニケーションのすれ違いを把握することが重要であるが、自己評価に基づく自記式の検査では

測定できにくい特性であり、他の手段を併用したり補完したりする必要があると考えられる。

4. 軽度 ASD を対象とした質問紙以外の心理検査によるスクリーニング

軽度 ASD のスクリーニングを考えるうえで、質問紙検査における自己理解の課題を補うために投影法検査の適用が考えられる。投影法検査は、あいまいな刺激に対する反応を分析することでパーソナリティを理解しようとする心理検査であり、回答を意図的に操作することが難しく、被検者の無意識的な側面が結果に投影されやすいと考えられている。アスペ・エルデの会（2013）の医療・福祉機関におけるアセスメントツールの利用実態調査でも、発達・知能検査や ASD 特性に関する検査以外に、描画テストや P-F スタディといった投影法検査の使用が報告されている。以下、軽度 ASD のスクリーニングに適用可能性のある投影法検査について、これまでの研究を概観しつつ利点と限界について述べる。

(1) 描画テスト

描画テストは、描かれた絵画の分析をとおしパーソナリティを理解する心理検査である。バウムテスト、樹木画テスト、HTP（House-Tree-Person）テスト、家族画テストなど、様々な主題の検査があり、アセスメントの目的により使い分けることができる。

ASD の描画については、バウムテストや人物画に関する研究が数多くみられる。バウムテストでは、パターンの構造化に乏しい平面的な描画（久保・牧原 2010）、左右対称な構図や描画の質における発達面の未熟さ（原・神谷・辻井 2011）、部分を組み合わせることで全体を形作ることによるアンバランスさ（中鹿 2004）といった特徴が明らかにされている。人物画においても、バウムテストと同様に不均衡な描画が認められ

ており、全体的に頭部が大きく、頭と胴体、手足のバランスが悪い（是枝・東條 2004）、人物画の基本的な部分が欠落し全体像が未熟な一方、部分の明細度（鼻孔や口など）が高いといった特徴がうかがえる（明翫・望月・内田ら 2011）。また、HTP 法を用いた研究（Lim, Slaughter 2008）では、アスペルガー障害と対照群の描画特徴について、詳細さや比率、パースペクティブなどを評価した結果、家屋画と樹木画では差がみられないものの、人物画ではアスペルガー障害に未熟さが認められ、人物に対する関心の乏しさが影響している可能性を示唆している。

言語表現や自己理解に課題がある ASD に対して、言語を全く介さずに実施できる描画テストは、質問紙ではとらえきれない ASD の特性を把握できる可能性がある。特に人物画には、普段のコミュニケーションや他人への関心が反映されやすく、ASD の対人場面における特性の把握に有用であると考えられる。ただ、ASD と描画テストに関する研究の多くは、児童を対象としており、成人、特に知的障害を伴わない ASD の青年や成人を対象とした研究は数少ない。描画は知的能力や発達段階によって大きな影響を受けるために、ASD の子どもにも認められる特徴が ASD の青年や成人にも認められるとは限らず、知能指数や年齢を統制したうえで描画テストの研究を進めていく必要がある。

また、従来用いられてきた描画の主題では、ASD 特性を適切にとらえることは難しい可能性がある。例えば、ASD の描画は目、鼻、口など顔の基本的な部分の省略も特徴の一つとされている（久米・生天目・小坂ら 2011）が、青年期の健常者の描画でも、顔の必須部分の省略は発達のみにみても生じることがある。他にも、絵の全体的なアンバランスさや左右対称の構図なども、ASD だけではなく、統合失調症や強迫性障害などの描画テストでも表現されることがある。バウムテストや人物画といった現行の描画テストでは、ASD と他の精神疾患との鑑別は難しく、まして軽微な ASD の特性を把握する手段

としては用いにくいと考えられる。描画テストから軽度 ASD をとらえるならば、ASD が困難を抱えやすい対人場面に焦点を当てた主題、例えば家族画のように複数の登場人物が出現するような描画や社会的な場面を描かせる描画を新たに開発する必要がある。

(2) P-F スタディ

P-F スタディは、Rosenzweig によって考案された心理検査である。日常生活で誰もが経験するようなフラストレーション場面において、フラストレーションを起こしている人物の発言を書き込むよう教示される(秦 2010)。パーソナリティ傾向だけでなく、対人場面の特徴をとらえることができる検査として臨床現場ではよく用いられており、最近是对人場面での課題を抱えることが多い ASD の特徴をとらえることができる検査として注目されている。

ASD の児童を対象とした P-F スタディに関する研究では、フラストレーション場面での一般的、常識的な反応の度合いを示す GCR % (集団一致度) の低さやスコアリング不能な反応 (U 反応) の多さが示されている(田辺・田村 1999; 満田・明彦・辻井 2009)。特に U 反応は、3 人の関係を考慮しなければならない場面において多くみられ、ASD は第三者(描かれていない人物)を想定しなければならない複雑な状況において適切な応答が難しいことが指摘されている。青年や成人の ASD を対象とした石坂・村澤・松村ら(1997)や池島・篠竹・高橋ら(2014)の研究でも、U 反応の多さや第三者の想定の高難度は示されており、自責の念の乏しさなど社会性の発達が未熟であることも明らかとなっている。

このように、ASD の対人関係における課題が P-F スタディの反応に反映されやすく、P-F スタディは ASD の対人場面における特徴を具体的に把握する手段として有用と考えられる。ただ、ASD に関する P-F スタディの研究は、児童を対象とした事例研究や十数名程度の少数例

による検討が多く、青年や成人の軽度 ASD を対象にした研究はほとんどみられない。P-F スタディの反応は、言語能力や社会経験によって変化することが知られており(田村・田辺 2004; 津田・橋本・森ら 2009)、今後、形式分析や U 反応の内容分析だけではなく、回答全体の質的分析などを行い、軽度 ASD の青年や成人に関する知見を収集する必要がある。なお研究が促進されない理由の一つとして、P-F スタディ(成人用)が作成されてから 60 年あまりが経過し、使用されている場面が現代社会に合致しなくなっていることが考えられる。臨床現場でも、質屋や電話交換手が登場する場面では被検者から「意味がわかりませんでした」といった声がよく聞かれ、ASD に限らず U 反応として評価されることが多い。今後、P-F スタディを軽度 ASD のスクリーニングツールとして用いるならば、時代に即した適切な場面設定、例えば、SNS でのコミュニケーション場面も取り入れるなど、軽度 ASD の対人場面での困難さをより反映した場面について検討する必要がある。

(3) ロールシャッハ・テスト

ASD の中には、いじめなどの迫害を繰り返し体験すると、心因反応として一過性の精神病様症状を示す者がいる(杉山 2002; 前田・鹿島 2005)。関係念慮や妄想・幻覚、幻聴と思われる訴えはまれではなく、このようなケースにおける ASD と統合失調症との鑑別は臨床上重要な課題である(明彦・辻井 2007)。これらの観点からロールシャッハ・テストにおける ASD の特徴については、量的・質的側面から知見が累積されてきた。

ロールシャッハ・テストの指標を使用した数量的分析では、現実吟味の障害や共感性の欠如、病態水準の低さなど、精神病を示唆する結果となりがちで、統合失調症との鑑別が困難であるとされている(辻井・内田 1999)。一方、反応内容などの質的な側面に注目した研究からは、

ASD に特有の反応がいくつか報告されている。反応の成り立ち（反応産出過程）に注目した明翫らの一連の研究では、プロットの細部に集中しやすく全体のまとまりを十分に検討しないまま反応してしまう、反応の正確性や正当性を主張する、検査者と相互交渉しながら反応の知覚理由を説明することが難しいといった特徴が示されている（明翫・内田・辻井 2005；明翫・辻井 2007；明翫 2016）。また、内田・明翫・辻井（2012）は、質疑段階での説明の仕方に注目し、ASD 群では、①説明を拒否する、②反応の確信・実感を主張する、③反応の知覚理由ではなく反応概念を説明する、④説明しているうちに反応概念がずれてしまう、⑤詳しく説明をするところと、全くそうでないところがあるなど説明の仕方に偏りがあるといった特徴がみられ、これらが統合失調症群に認められなかったことから、ASD 群に特徴的な応答であると述べている。他にも、知的能力に問題のない18歳以上のASDを対象に継起分析による事例検討を行った北村・小嶋・千葉ら（2006）、北村・高橋・篠竹ら（2014）の研究では、知覚の柔軟性の乏しさや固執傾向のほか、ASDの認知的な側面の検討から3タイプ（雑駁W型、作話W型、微細D型）を見出しており、部分を適切にとらえながら全体像にまとめていくことの困難さを共通の特徴として報告している。

このように、ロールシャッハ・テストの反応を質的な側面から詳細に検討することで、ASDに特有の反応を見出すことができると考えられる。ただ、ロールシャッハ・テストの質的分析には高度な技能と相当の時間を要するために、実施できる者が限られ、汎用性に乏しいという課題があり、ASDのスクリーニングツールとして簡便に用いることは難しい。また、既存のロールシャッハ体系の量的分析では、ASD特性を測定する特定の指標が用意されておらず、今後、ASDまたは軽度ASDの鑑別を可能にする新たな指標を見いだす必要がある。

(4) TAT（主題統覚検査）

TATは、Murrayが開発した性格検査である。人物が描かれた絵を見て物語を作る検査で、物語には「その人の生き方」や「その人自身の世界」が描き出され（安香・藤田 1997）、潜在的な欲求や人間関係などを明らかにすることができる。

TATによるASDの研究としては、認知的な問題を検討した石牧（2010、2012）や人間表象の特徴を検討した関山（2014）の研究が挙げられる。石牧（2010）は、全体の内容を要約してつかむことが困難というASDの認知的な課題が、物語の構成を求められるTATに反映されやすいと考え、TATの形式的側面に焦点をあてた研究を行っている。石牧（2010）は、男女共通図版12枚の反応における分析指標を検討した結果、ASD群は対照群に比べて、時系列や物語の軸となる反応が少なく、内面や感情に関する言及に乏しいことを示している。また、これらの特徴は、刺激材料が多い図版や登場人物の表情・動きが少ない図版にみられる傾向があり、図版の細部にとらわれやすいという認知的な特徴についても言及している。さらに、TATの反応には、中枢性統合の問題や表情認識の困難さなど、ASDの様々な特性が反映されている可能性も示唆している（石牧 2012）。

関山（2014）は、人間表象に焦点をあて、4枚の図版への反応を、登場人物の人数や関係性など5つの観点から分析している。その結果、物語内に登場させる人物が少ない、登場人物同士の関与の程度も弱く関係性が確定的でないなど、人間関係に対する関心の低さや受身な態度を明らかにしている。さらに、蔵下・横田・君塚ら（2015）の研究でも、前述の研究と同様に、ASDは絵の細部に気をとられやすく全体を物語としてまとめることが難しい、対人関係への言及が少なく登場人物への感情移入が困難であることが示されている。

このように、TATにはASDの認知的な課題や対人関係上の課題が反映されやすい。特に複

数の人物が描かれる図版への反応を検討することで、人との関わり方や状況のとらえ方など具体的なコミュニケーション上の課題を把握することができ、ASDのスクリーニングツールとして役立つ可能性が考えられる。ただし、ロールシャッハ・テストと同様に、実施から分析・解釈までに時間がかかり煩雑であること、ロールシャッハ・テストほど明確な分析・解釈方法が公表されていないこと、数量化が難しいことなどの理由により、研究はもとより臨床現場においても十分に活用されていない現状がある（粟村 2007）。今後は、ASD特性を反映しやすい図版について実証的な研究を進め、特に軽度ASDのスクリーニングツールとして簡便に用いる方法を開発することが望まれる。

5. 軽度ASDの青年や成人を対象としたスクリーニングツールに必要な要件と今後の課題

青年期や成人期まで見過ごされるような軽微なASD特性のスクリーニングにあたり、自記式の質問紙検査では自己理解の質や程度が課題となる。一方、投影法検査では、反応の質的分析などを通じて、コミュニケーション上の微妙なすれ違いやの外れなやりとりなど、ASDの対人場面の様相を把握できる可能性がある。ただ、ロールシャッハ・テストやTATは実施や結果の整理・解釈に多大な時間を要するうえに、検査者の高い技能と豊富な臨床経験が必要で、被検者の心理的な負担も大きいことから、これらをスクリーニングツールとして直ちに使用することは実際的でない。描画テストも、現行の主題で使用する限り、他の精神疾患との鑑別の難しさもあり、軽微なASDの特性を把握する手段としては用いにくい。

軽度ASDをスクリーニングするためには、新たな心理検査の開発、または既存の心理検査の分析方法の改良が必要である。例えば、質問紙検査であればMMPI（ミネソタ多面人格目録）

の妥当性尺度のように、ASD特性を評価する尺度とは別に、自己理解の程度や文章を正しく理解し一貫した回答を行っているかどうかを検出する尺度を備えた質問紙検査の作成が必要であろう。前述の通り、セルフモニタリングとは、社会場面における自分の行動の観察・統制に関するパーソナリティ傾向であるが、このセルフモニタリングの測定が妥当性尺度として機能する可能性があり、今後の検討課題と考えている。

また、投影法検査として、対人コミュニケーション上の特徴を最も把握しやすいP-Fスタディは、軽度ASDのスクリーニングツールとしての発展が大いに期待される。しかし、時代に即した新たな場面設定や反応の質的分析方法の確立といった課題が残る。ASDの中には言語よりも図示による理解の良好な者が少なくないことから、P-Fスタディのように、社会的場面の描かれた絵などを視覚的刺激として使用する検査は有用であると考えられる。今後、軽度ASDの青年や成人が課題を生じやすい社会的場面を調査した上で絵として提示し、反応を量的・質的に分析していくなど、スクリーニングツールとしての適用可能性について検討していく必要があるだろう。

両者の組み合わせにより、軽微なASD特性の検出がこれまで以上の精度で行えることが想定される。本稿で提示した軽度ASDのスクリーニングツールの開発では、年齢や知能指数などの統制に加えて、近年指摘されている性差にも対応した質問項目の選定や指標の設定も重要になると考えられる。

文献

- 安香宏・藤田宗和（編）（1997）：『臨床事例から学ぶTAT解釈の実際』新曜社。
アスペ・エルデの会（2013）：発達障害児者のアセスメントツールの効果的使用とその研修について『厚生労働省平成24年度障害者総合福祉推進事業報告書』：1-100。
粟村昭子（2007）：TAT（主題統覚検査）についての一考察『関西福祉科学大学紀要』10：55-62。

- Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., Frith, U. (1985): Does the autistic child have a "theory of mind"? *Cognition*. 21: 37-46.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., Clubley, E. (2001): The Autism-Spectrum Quotient (AQ): Evidence from Asperger Syndrome/High-Functioning Autism, Males and Females, Scientists and Mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*. 31(1): 5-17.
- Ben-Itzhak, E., Abutbul, S., Bela, H., Shai, T., Zachor, D.A. (2016): Understanding One's Own Emotions in Cognitively-Able Preadolescents with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*. 46: 2363-2371.
- Bowler, D.M. (1992): "Theory of Mind" in Asperger's Syndrome. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 33(5): 877-893.
- Dell'Osso, L., Carpita, B., Gesi, C., Cremone, I.M., Corsi, M., Massimetti, E., Muti, D., Calderani, E., Castellini, G., Luciano, M., Ricca, V., Carmassi, C., Maj, M. (2018): Subthreshold autism spectrum disorder in patients with eating disorders. *Comprehensive Psychiatry*. 81: 66-72.
- ハッペ, F (1997): 『自閉症の心の世界』星和書店 Happe, F. *Autism an introduction to psychological theory*. London, UCL Press, 1994.
- 秦一士 (2010): 『P-F スタディ アセスメント要領』北大路書房.
- 原幸一・神谷美里・辻井正次 (2011): 高機能広汎性発達障害児のバウムテストの発達特徴『発達障害研究』33(3): 314-321.
- 本田秀夫 (2013): 『自閉症スペクトラム 10 人に 1 人が抱える「生きづらさ」の正体』SBクリエイティブ.
- 池島静佳・篠竹利和・高橋道子・北村麻紀子・千葉ちよ・前田貴記 (2014): 高機能広汎性発達障害における P-F スタディ (成人用) の特徴『心理臨床学研究』32(1): 137-143.
- 石井卓 (2010): 自閉症スペクトラムの「自閉」と統合失調症の「自閉」『精神科治療学』25(12): 1605-1611.
- 石牧良浩 (2010): 広汎性発達障害者の TAT 反応に関する研究『ロールシャッハ法研究』14: 27-34.
- 石牧良浩 (2012): TAT 反応領域からみた広汎性発達障害者の認知特徴『ロールシャッハ法研究』16: 13-19.
- 石坂好樹・村澤孝子・松村陽子・神尾陽子・十一元三 (1997): 高機能自閉症にみられる認知障害の特質について—心理テストによる検討—『児童青年精神医学とその近接領域』38(3): 230-246.
- ジェームズ, W (1992): 『心理学 (上)』岩波書店 James, W. *Psychology, briefer course*. New York, Henry Holt and Company, 1892.
- 菊池哲平 (2009): 『自閉症児における自己と他者、そして情動 対人関係性の視点から探る』ナカニシヤ出版.
- 北村麻紀子・小嶋嘉子・千葉ちよ・篠竹利和・高橋道子・前田貴記 (2006): 高機能広汎性発達障害のロールシャッハ・テストの特徴—大学生の 3 事例の検討—『ロールシャッハ法研究』10: 3-15.
- 北村麻紀子・高橋道子・篠竹利和・千葉ちよ・池島静佳・前田貴記 (2014): 自閉症スペクトラム障害のロールシャッハ・テストの特徴—部分反応が多い 3 事例—『ロールシャッハ法研究』18: 1-9.
- 久保りつ子・牧原寛之 (2010): 高機能広汎性発達障害児のバウムテストの描画特徴—学童期の 30 例を通して—『日本心理学会第 74 回大会』: 357.
- 久米紗織・生天目聖子・小坂礼美・中村美乃里・義村さや香・十一元三 (2011): 広汎性発達障害のある生徒における人物画の特徴『日本児童青年精神医学会総会抄録集』52: 241.
- 蔵下智子・横田悠季・君塚千恵・富澤貴宏・石原奈保子・野口亜美梨 (2015): 自閉症スペクトラム障害・統合失調症の鑑別における効果的な心理検査指標の探索『研究助成論文集』51: 85-93.
- 是枝喜代治・東條吉邦 (2004): 自閉症児の身体意識能力の特性—運動模倣と人物画の評価から—『自閉性障害のある児童生徒の教育に関する研究』7: 65-70.
- Lee, A., Hobson, R.P. (1998): On developing self-concepts: A Controlled Study of Children and Adolescents with Autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 39(8): 1131-1144.
- Lim, H.K., Slaughter, V. (2008): Brief Report: Human Figure Drawings by Children with Asperger's Syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 38(5): 988-994.
- 前田貴記・鹿島晴雄 (2005): 広汎性発達障害のロールシャッハ・テスト—統合失調症との鑑別『Schizophrenia Frontier』6(3): 199-204.
- 満田健人・明翫光宜・辻井正次 (2009): PF スタディ反応における広汎性発達障害児と定型発達児の比較研究『小児の精神と神経』49(3): 221-230.
- ミード, G.H (1995): 『精神・自我・社会 デューイ=ミード著作集 6』人間の科学社 Mead, G.H. *Mind, Self, and Society from the standpoint of a social behaviorist*. Chicago, The University of Chicago Press, 1934.
- 明翫光宜 (2016): 発達障害を中心に『包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌』20(1): 19-25.
- 明翫光宜・望月知世・内田裕之・辻井正次 (2011): 広汎性発達障害児の人物画研究 (1): DAM 項目による身体部位表現の分析『小児の精神と神経』51(2): 157-168.
- 明翫光宜・辻井正次 (2007): 高機能広汎性発達障害と統合失調症におけるロールシャッハ反応の特徴—反応様式の質的検討—『ロールシャッハ法研究』11: 1-12.
- 明翫光宜・内田裕之・辻井正次 (2005): 高機能広汎性

- 発達障害のロールシャッハ反応 (2) 一反応様式の質的検討—『ロールシャッハ法研究』9：1-13.
- 中鹿彰 (2004)：バウムテストから見た広汎性発達障害の認知特徴『心理臨床学研究』21(6)：611-620.
- 杉山登志郎 (2002)：Asperger 症候群と高機能広汎性発達障害『精神医学』44(4)：368-379.
- スナイダー、M(1998)：『カメレオン人間の性格—セルフ・モニタリングの心理学—』乃木坂出版 Snyder, M. *Public Appearances Private Realities The Psychology of Self-Monitoring*. New York, W.H.Freeman & Company, 1986.
- 関山徹 (2014)：青年期広汎性発達障害者における TAT の特徴：人間表象の観点から『鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編』66：139-147.
- 滝吉美知香・田中真理 (2011)：自閉症スペクトラム障害者の自己に関する研究動向と課題『東北大学大学院教育学研究科研究年報』60(1)：497-521.
- 田辺正友・田村浩子 (1999)：自閉症児の対人関係認知に関する研究—PF スタディによる検討—『奈良教育大学紀要』48(1)：199-208.
- 田村浩子・田辺正友 (2004)：高機能自閉症児の対人関係認知に関する研究—PF スタディによる検討—『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』1：39-43.
- 十一元三・神尾陽子 (2001)：自閉症者の自己意識に関する研究『児童青年精神医学とその近接領域』42(1)：1-9.
- 津田芳見・橋本俊顕・森健治・西村美緒・福本礼・藤井笑子・高原光恵 (2009)：高機能広汎性発達障害のある幼稚園児・小学生における認知・行動発達に関する検討『脳と発達』41(6)：420-425.
- 辻井正次・内田裕之 (1999)：高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応 (1) 量的分析を中心に—『ロールシャッハ法研究』3：12-23.
- 内田裕之・明翫光直・辻井正次 (2012)：自閉症スペクトラム障害のコミュニケーションの問題について—ロールシャッハ・テスト質疑段階でのやりとりを通して—『ロールシャッハ法研究』16：3-12.
- 山口真美 (2016)：『発達障害の素顔：脳の発達と視覚形成からのアプローチ』講談社.